毎月十廿日發行
定價　一部十錢　一ケ年三圓
廣告料　一行五十錢
發行兼編輯人　伊藤　隆次
印刷人
福島縣小名濱町
發行所　磐城水産新報社

小名濱海面埋立問題とは何か？

小野普平氏が商港實現を見越して商港防砂堤西側四萬貳千餘坪の拂下を出願し一大事業を目論見、拂下申請準備として、漁業組合の同意と町會の贊意とを得たるに對し、小名濱民政黨昭和會が反對を唱へ町民を歴訪し、七百余名の反對調印を得て縣當局に反響陳情し且つ縣會開會中民政黨縣議野崎外數名の建議案となり地元小名濱に於ては町民大會の名に於し、大演說會を開催し反對氣勢を揚ぐるなど正に重大問題化せんとしつゝある。

何れが是か非かは其結果を見ざる限り論斷の限りに非ざるも、町民各方面の意見等を叩き得たる材料と、表面化せる事實等を綜合して嚴正なる批判を試みんとするものである。

小野普平氏は何故問題化せんとするか

海面埋立問題を町民に釋明せぬか

小名濱町の恩人として、大件として贊意を得た、然し小名濱商港を將に現實化すて、完成後は一大昆布會社る迄努力せられた君の功績を起し、小名濱の隆昌を計たる物質的に、精神的に何るとか。斯く論じ來れば何人の追隨も宥さざる貢獻は故に昭和會なる者が反對何人と言へ共、否定する事るか、小野氏たるもの參考出來まい。すべきである。

此小野氏が空摸たる海面埋筆者は惟ふ、小野氏の眞意立を案出し漁業權の關係に と實際を知らざる爲めである、漁業組合の同意を得て其着 又町民も七八百名の反手の際一万五千圓を提供し 對調印も片聞きの爲もある又町の賛意を得る爲めに、 故、當然小野氏の義務とし町會を開き、完成の曉きに ても、細大洩さざる說明書四万二千餘坪の一割五分即 又は釋明を出し、其實際を一般に知らしむ可きである 默ゝたるは常に何物かを考ち六千餘坪を提供するを條 察して居る、君なればこそ

然るに超然として、此問題を人事の如き態度にあるを 余は遺憾に思ふのである。

昭和會が愛町的發露とするも輕擧盲動を慎め

我々人類は法律を中心に軌道として存在して居る限り輕式的でなくてはいけない其法律が神樣が作たのでは ない、やはり人間同志が作たのだ、そこには人道上より見て必らず、矛盾がある たのだ、何れも權者が作た法律だからだ。

昭和會員諸氏君等の反對理由は將に商港實現すれば地元の寄附金が五万十万の大金だ、然るに町財政は極端に疲幣して居る。

而も小野氏の今回の埋立事業は商港の附隨事業だ、此商港の餘澤たる事業は町の仕事として經營するのが當だと云ふにある

一應御最もの說である。

小野氏が茲に案出して既に諸手續を踏た今日、其事業は有利だから町の事業にせなき能はずである。

假に本町に其權利を得るとするか大体經費は三十万と注さる、事業が町債又は出

旭日昇天の發展を見たので 當然漁業家方面の人材は町 ある。 の中軸に携り町百年の大計 君に與ふに他の事業たりとも を誤らざる樣心すべきである。 も必ず成功するなるべし。

フースヒーと人物

水産と人物

漁業家　田中權次郎君

年齡漸く四十路に達したばかり、小名濱は今や將に進展せんとするとき、君の双肩に荷ふべき仕事は多々あるべし。公人として町の樞軸に進出しやゝともすれば濁り氣分の本町の爲に公平と云ふ清良劑を投せられんことを。

小名濱は海より發展するは

丸八鐵工場主

倉兼常八君

君は海軍生活十數年且つ二三鐵工場の主任として世を泳ぎ、其貯蓄せる技術を抱で小名濱へ本城を築へた、一般鐵工場等の職人は世渡り上手を專一とするに、君は然らず　處女の如き純眞

君の感がある。 宣なる哉、小名濱鐵工場の 代表的人物として自他共に 相許して居る。

君は又奮圖を好み、機械類の技巧に至て世既に定評あ り。其繁忙たる君を裏書す るものである。

味がある。即ち溫情眞劍士 味がある。

今や商港を目前に控へ益々 君の手腕を振ふに時を借り 自重自愛本町の爲めにも益 々發展されん事を。

馬目乘合自動車部
主任　馬目喜右エ門
小名濱中丁
電話高四七番
正名町出張所　連日午後出張

木村外科醫院
平町立町　電三〇九番

滿足本舗　鈴木寫眞館
玉川村林城
小名濱町中島

小名濱電話番號
一月一日現在

七五　馬上政二　漁業海産物商
一〇一　カスケートカフエー　西洋料理支那料理
一〇二　八島屋商館　漁業海産物商
一〇四　尾城寫眞店　美術寫眞師
一〇五　木田齒科醫院　齒科一般口腔外科
一〇六　伊藤土提反　米雜穀精米石炭
一〇七　菅原勳　麹製造
一〇八　大平幸太郎　木材、製板業
一〇九　立花新次郎　海産物商
一一〇　磐城水産工業株式會社
一一一　新瀧　御料理會席
一一二　小名濱信用組合
一一三　磐越銀行小名濱出張所
一一五　鈴木元次郎　海産物商
一一七　野口末松　貨物自働車業